

I

「はああ~~~~~……」

金曜日の夜。明日は仕事が休みであろう人たちが楽しそうに騒いでいる横を、とぼとぼと歩く。

ほかの人のミスを押しつけられて叱責され、そのまま夜遅くまで残業する羽目になった。誤解はなんとか解けたけど、だからといって残業がなかったことになるわけではない。仕事を終わらせて家へ帰る脚は重かった。

明日は休日なのに、外でおいしいものを食べる元気もない。

そんな時、スマホが震えた。会社からの連絡かと思って怯えながら見てみると、そこには意外な名前が表示されていた。

「優斗……？」

それは、年下の幼馴染からの電話だった。メッセージでやり取りはしていたけれど、電話は先週ぶりだ。通話ボタンを押して耳に当たると、聞きなれた声が聞こえてきた。

「あ……陽菜ちゃん。急に電話してごめんね。陽菜ちゃんしか頼れる人がいなくて……」

「優斗？ 何があつたの？ 今どこにいるの？」

電話の向こうから、ざわめきが聞こえてくる。良からぬことに巻き込まれたのだろうか。慌てて聞くと、優斗は意外にもすぐ近くに

いることが分かった。

優斗は、私がいま出てきたばかりの最寄り駅にいますという。慌てて来た道を引き返すと、すぐに駅が見えてきた。

駅の改札口に立っていたのは、まぎれもなく優斗だった。

「陽菜ちゃん……！」

ほっとしたように駆け寄ってくる優斗は、前よりも成長したように見えた。体つきもがっちりして、そのせいで余計に小顔に見える。甘く整った顔立ちは、誰もが振り返るほど格好いい。

長い脚で優斗が近付いてくる。冗談抜きで、私の二倍くらい足が長いと思う。近くまで来た優斗を見上げると、優斗が少しかんだ。……いつも、優斗がしていた行動だ。

久しぶりに会ったのに変わらない行動に、目の前にいるのが優斗だと、やっと飲み込めた気がした。前に会った時より格好よくなつて、どうしていいか少し悩んでいたから。

「ごめんね、陽菜ちゃん。こないきなり……」

「ちょうど仕事が終わったところだから、気にしないで。ご飯は食べた？」

「……まだ。陽菜ちゃんは？」

「私もだよ。一緒に食べよう」

駅に近い適当な居酒屋に入ると、店中の視線が一気に優斗へと向いた。久しぶりのこの感じに、優斗と会っていることを実感する。店の端っこの席に座ると、優斗はビールを頼んだ。

「前はあまり飲めないって言ってたのに……飲めるようになったんだね」

「会社の飲み会で、どうしてもね。苦手なんだけど、こういう時に慣れておかないと」

「私の前で無理しなくていいんだよ？ ジュースを頼もうか？」

「もう子供じゃないよ」

くすつと笑う優斗は、確かにもう子供ではなくなっていた。誰が見ても、働いている社会人だ。

すぐに運ばれてきたお酒で乾杯し、お通しを食べる。まだ口が重い優斗に、なんでもないように話しかけた。

「前に会ったのは三ヶ月くらい前だよ？ とはいっても、メッセー

ジのやり取りをしてたから、そんなふうには感じないね」

「うん。二か月と二週間ぶりだよ。陽菜ちゃんは少し元気ないよね？
何かあった？」

「えっと……残業があつて……。あ、料理が来たよ」

料理を運んできた女性が、頬を染めて優斗を見つめた。けれど優斗は私から目をそらさずに、目の前に置かれたお皿をさりげなく二人の真ん中に置いた。

女性はしばらく優斗を見つめていたけれど、客に呼ばれて去っていった。可愛い店員より私を見る優斗に、少しだけ落ち着かなくなる。

優斗は運ばれてきた料理を取り分けてくれながら、さりげなく話

題を変えてくれた。

「そういえば、陽菜ちゃんがくれたピアス、今でもつけてるんだよ。ほら。陽菜ちゃんに穴をあけてもらって、本当に嬉しかったな……。あの時から、働く時以外に外したことがないんだよ」

「大学の入学祝いにプレゼントしたよね？　会う時はずっとつけてくれてるよね」

優斗が耳をみせると、そこには私が入学祝いにプレゼントしたピアスが揺れていた。かたくなにイヤリングではなくピアスがいいと言いつつ優斗と一緒に、ピアスを選んだ思い出がよみがえる。

ピアスの穴を開けてほしいと言われた時は驚いて拒否したけど、結局それも込みでプレゼントだと押し切られてしまった。

「プレゼント、すっごく嬉しかったよ。でも、陽菜ちゃんと同じ大学に行きたかったなあ……。陽菜ちゃんに通う女子大に、さすがに俺は行けなくて」

懐かしい話に、思わず笑ってしまう。確かにあの頃の優斗は、同じ大学に通えなかったことをずいぶん悔しそうにしていた。

「そういえば、あの頃からずっと、男性のことではいつも優斗に相談にのってもらってるよね」

「もちろん、いつでも頼って。男のことについて一番わかるのは、男だから。陽菜ちゃんが変な男に捕まったら大変でしょ？　俺、けっこう本気で相手のこと調べてたんだよ」

「調べてたの!？」

「うん。だって、陽菜ちゃんに釣り合う人間かどうか、ちゃんと見極めないといけないでしょ」

笑いながら言う優斗だけれど、その目はまったく笑っていない。こうしてみると、優斗は小さい頃から変わっていなかった。人見知りで、心配性で、近寄ってくる人間を怖がって。

私たちが住んでいるところは田舎だったから、同い年の子供があまりいなかった。数少ない子供の中で、優斗と気が合うのは私だけだったのだ。

優斗の両親は共働きだったから、優斗はよく私の家に遊びに来ていた。一緒に遊んで、一緒に寝て、一緒に笑って。優斗と私はいつも一緒にいたけど、大学進学で私だけが一年早く街を出ることになっ

た。予想に反して、優斗は泣かなかった。

「すぐに陽菜ちゃんを追いかけから、待ってて。その間、誰かを陽菜ちゃんが一番にしたら嫌だよ」

と、強い瞳で言ってきた。その一年後、優斗は近くの大学に進学してきた。住む場所も、私の家からほど近いところに借りていた。

近くにいるから、大学に入っても一緒に過ごす時間はやっぱり多かったように思う。優斗はあいかわらずモテていたから、女の子たちは何度も睨まれたっけ……。

それなのに優斗は、告白してくる女の子には目もくれず、いつも私の隣にいた。花火大会ですら、私と一緒に行ったのだ。

その時は二人で花火を見ながら、

「俺が陽菜ちゃんの彼氏になったら、来年も一緒に来られるよね？」
と言われた。

「なに言ってるの、彼氏じゃなくても一緒に来るよ。当たり前でしょ？」

と返した。小さい頃から一緒に夏祭りに行っているのに、なにを今さら。

笑って流した私に、優斗は笑い返したただけだった。優斗は昔から、そういう甘い冗談を言う子だった。それに慣れてしまっただけで受け流したけれど、後でドキドキしたことは私だけの秘密だ。

それから一流企業に就職した優斗とは、以前と変わらずメッセー
ジのやり取りをしている。けれど就職して物理的な距離が離れたせ

いで、会う頻度はがくと減った。

それでもいつからか、優斗のことを考えると、胸の奥からむずがゆい気持ちがあがってくるようになった。

優斗は、就職するまではいつも私を迎えに来てくれた。重い荷物を持ち、体調が悪い時に看病をしてくれた。優斗はいつでも一番に頼れる人だった。

少しいい雰囲気になる人がいても、気づけば「優斗ならこうしてくれるのに」と、心のどこかで誰かを測る基準になっていた。

「私に恋人が出来ないのは、優斗のせいだよ」

「そう？ それならよかった」

冗談のような愚痴も、さらっと受け止めて返してくれる。いい感

じにお酒が回ったところで、優斗はようやく重い口を開いてくれた。
「え……じゃあ、本社勤務になったのに、手違いで会社の寮が空いてなかったってこと？」

「……うん。アパートも見てみたけど、家賃がすごく高いところしか空いてなくて……。寮に入れるまで、陽菜ちゃんの家泊めてくれないかな……？」

「もちろん、いいよ！ あ、でも家はすごく狭いの。優斗が嫌なら……」

「嫌なわけない！ ありがとう、陽菜ちゃん！」

それから優斗は、狭い1LDKの家に住むようになった。優斗の荷物は最低限しかない。荷物を詰めた段ボールは、寮の管理人室で預かってくれているようだ。

優斗と一緒に住むと、もしかしたら、お互い気疲れするかもしれない。そう思っていたけど……。

「なんか、すごく快適じゃない……？」

本社で働くようになって優斗は忙しいと思っていたのに、毎日定時に帰ってくる。残業しないと終わらないのはむしろ無能、という空気のようにだ。まだ就職したばかりなのに仕事を終わらせて帰ってくる姿が、エリートコースを歩んでいる証に見える。

私より早く帰ってくる優斗は、毎日ご飯を作って掃除をすませ、

私を駅まで迎えに来てくれた。

「家に住ませてもらってるんだから、これくらいはしないかね」

そう言って、私をたっぷり甘やかしてくる。私がしているのは、お皿を洗ったりゴミを分別したり、せいぜいその程度だ。

顔も性格もいい優斗が、今までより明らかに近い距離感でせつせと私を甘やかしてくる。そのせいで、優斗を弟ではなく、一人の男性として意識してしまう瞬間が増えていった。

「陽菜ちゃん、これ好きだね？　はい、あーんして？　食べたらお風呂に入ってきてね」

「あ、あーんなんて、今までしたことなかったよね……？」

「俺も社会人になってようやく、陽菜ちゃんがどれだけ苦労してい

るかわかったんだ。疲れてるみたいだから、食べさせてあげたいだけだよ」

私を見つめる目は愛情がこもっていて、声はとろけるように甘い。私が優斗を呼ぶと、嬉しそうに振り返るのが普通に感じられるようになってしまった。

「髪を乾かしてあげるから、そのあいだ肌のお手入れをしたらいいよ。俺、陽菜ちゃんの髪を乾かすの、好きなんだ。終わったらマッサージしてあげるね」

「優斗のほうが疲れてるでしょ？　今日は私がマッサージしてあげる」

「嬉しいけど、今日は俺にさせてほしいな。陽菜ちゃんのこと、た

くさん甘やかしてあげると幸せになるんだ」

そう言って、本当に髪を丁寧に乾かしてマッサージをしてくれる。その手つきにいやらしいものはなく、的確にツボを押してくる。おかげで肩こりがなくなってきた。

——もう、姉弟ごっこの延長では説明がつかない。子供の頃から優斗を知っているはずなのに、今は知らない男の人みたいでドキドキする。優斗はもう、幼い子供ではなく一人の男性だった。

それは、今まで気付いていなかった優斗への恋を自覚させるには、十分だった。

「はあ……」

自覚してしまった恋と、優斗との甘い生活。それらに悩んでいる

のに、新たな悩みが出来てしまった。

……それは、体がムラムラすることだった。

自分がマゾだと自覚している私は、おそらく性欲が強かった。狭い1LDKでは新しいベッドを置くこともできず、狭いベッドで二人で寝ていた。優斗のたくましい体を感じながら、毎日抱きしめられて眠る。

「ごめん、俺の体が大きいせいだ……。せめて陽菜ちゃんがベッドから落ちないように、抱きしめておくね」

こんな状態でオナニーが出来るわけもなく、優斗が男だと感じるたびに体がうずいた。お風呂でしてみたこともあったけど、すぐそばに優斗の存在を感じると集中できないとわかっただけだった。

私も優斗も土日が休みで、一人になるタイミングもない。

「ふ、う……っ♡　っ、……♡♡」

だけど、どうしても限界だった。明日は休みだからと言って、優斗にお酒をたくさん飲ませた。

優斗が寝入ったことを確認して、手をそつと下腹部に伸ばす。優斗に抱きしめられているけれど、寝ているからその腕に力が入っていなかった。

下着の上から、そつとクリトリスを触る。それだけで信じられないほどの快感が体を走った。一か月以上ただひたすら発情していた体は、敏感になりすぎていた。

「っ、は、へっ……？♡　あっ……？♡」

ちゃん♡と下着の上からクリトリスに触れるだけで、すごく気持ちいい。すりすり♡とクリトリスを撫でると、下着がすぐに濡れていった。

（擦るだけで気持ちいい……♡　こんなのすぐイッちゃう♡　優斗に抱きしめられてるの♡　♡　下着の上からクリトリス擦るだけですぐイく……！♡）

優斗の香りに包まれながら、指が早く動く。目の前がちかちかして、一か月ぶりの絶頂に身をゆだね――。

「……ねえ。オナニーしてるの？」

優斗の声がして、ベッドサイドの電気がつけられた。部屋がパツと明るくなる。

「ゆ、優斗っ……!!? いつの間に起きて……!!?」

パジャマの中に入れていた腕を抜こうとしたけれど、優斗にぎゅつと抱きしめられた。その動作で、指がクリトリスにぐりゅっ♡と押しつけられてしまう。

「っお……!!?♡」

「ふふっ、可愛い声……♡ 今までずっと、俺がいるからオナニーできなかったんだね。性欲を解消するなら、俺にさせて? 絶対に気持ちよくするから」

「な、なにを言ってるの? 優斗はそんなことしないでいいよ!」
「でも、陽菜ちゃんのおまんこがうずうずしちゃってるのは、俺と一緒に住んでるせいでしょう?」

「お、おま……!!? 優斗、なにを言ってる……!」

「俺はもう子供じゃないって言ったでしょ? こういう知識も、当然あるよ。部屋に置いてもらっているんだし、俺のせいでオナニーできなかったんだから……陽菜ちゃんのおまんこを、気持ちよくしてあげたいな」

そんなことを言われたって、頷けるはずがない。優斗は家事もたくさんしてくれて、お給料を半分も渡してくれるのに。優斗をこんなことに利用したくないし……何より、そんな理由で気持ちよくされても虚しくなるだけだ。

どうすれば優斗が諦めてくれるか考えて……あることを思いついた。

（私の性癖を素直に言えば、ドン引きしてやめるのでは……!? 優斗との関係が終わるのはつらいけど……。本当につらいけど！ このまま優斗に望まないことをさせて嫌われるより、よっぽどいいはず、だよね……）

胸がつきんと痛む。けれどこうしている間も、優斗は私を抱きしめる腕をゆるめなかった。私が頷くはずだと、きらきらした目で見つめてくる。

「じ……実は、私……ドMなの。いじめられたいから……優斗には、無理だと思う。だ、だから……」

「……ふーん。どんなことをされたいの？」

「えっと……クリトリスをいじめられてずっとイカされ続けるとか、

バイブとかつけてちよっと放置されるとか、命令されるとか……。

あ、あはは、こんなの気持ち悪いでしょ？」

「気持ち悪いなんて、思うはずがないよ。むしろ興奮してるのに」
ぐっ♡とお尻に硬いモノが当たる。それが優斗のおちんぽだとわかった途端、体がぶわっと熱くなった。

おまんこがじゅわっ♡ととろけて、優斗のおちんぽを勝手に欲しがってしまう。

「俺も、陽菜ちゃんをずっといじめてあげたいと思ってたんだよ。だから、相性ぴったりで嬉しいな……♡ おちんぽは入れないから、陽菜ちゃんを気持ちよくする特権をちょうだい？」

耳元で低い声で話されると、耳がぞわぞわ♡してしまふ。嫌われ

る覚悟で優斗に性癖を告げて、こんなふうを受け入れられるなんて思ってもみなかった。優斗を拒否する理由がどんどん消えていく。

「一度だけ、チャンスがほしい。嫌だったらすぐにやめるから……。お願い」

後ろから、ぎゅっと抱きしめられる。切実な優斗のお願いに、私はあっけなく頷いてしまった。

「……うん。いいよ。でも、途中で気持ち悪くなると思うから、その時は……」

「気持ち悪いなんて、絶対に思わない。むしろ、陽菜ちゃんのほうが心配だな……。気持ちよすぎてつらくなったら、いつでも言うて。すぐにやめるから」

「わ、わかった……♡」

「陽菜ちゃんの期待を裏切りたくないから、最初に聞いておくれ。優しくされたい？ それとも……思いきりいじめてほしい？」

「あっ……♡ お、思いきりっ……♡ 思いきり、いじめてほしいっ……♡」

「ん、よかった。俺も思いきりいじめたいと思ってたから……♡」
心臓がばくばくと動いてうるさい。背中越しにも優斗の心臓が速く鼓動しているのが伝わってきて、少しほっとする。

体ごと向きを変えて優斗に向かい合うと、本当に嬉しそうな顔をしていた。それを見て、胸がきゅんとする。

（もしかしたら、優斗も私を好きでいてくれるんじゃないか……？）

そんな気がしたけど、聞いていいのかわからない。こういう時、わざわざ気持ちを確認しないのがスマートだと聞いたことがある。

（……今夜はきつと、一回きりのチャンスなんだから。下手なことは言わないでおこう……）

ぎゅつと優斗に抱き着くと、前よりも鍛えられた体を感じた。優斗の速い心臓の音を聞きながら、目を閉じる。

抱き着いた優斗は、なぜか慌てていた。さっきは自分から私を抱きしめていたのに、今は真っ赤になっている。

それを見ると、くすつと笑いが漏れた。優斗は年下だから、私がリードしてあげなくちゃ。

——そう、思ったのに。

ぐるんっ。

抱きしめられたまま、体が優しく回転する。ベッドに仰向けになつた私の上に、優斗が覆いかぶさつてきた。逃げ場がないような感覚に、じゅわっ♡とおまんこが濡れる。

「じゃあ、今から思いきりいじめてあげる♡ 最初に、守らなくちゃいけない約束事を言うよ。ひとつ、イッたら報告すること。ふたつ、自分の気持ちを隠さないこと。嫌なことは嫌だと言って、気持ちよかったらそう言ってね。恥ずかしいからって隠しちゃう駄目だよ」

「わかりましたっ♡ 約束、守りますっ……♡」

「今から俺に調教されちゃうんだよ？ それなのに目をハートにして敬語を使って……本当に可愛いね……♡」

優斗の顔が近付いてくる。そっと目を瞑ると、想像とは違う場所に唇が落ちた。頬に柔らかな感触がして、ドキドキしながらも残念に思えてしまう。

そんな私を見て、優斗はくすつと笑った。今まで格好いいけど可愛いと思っていたのに、なんだか色気がすごい。

「クリトリスが性感帯なんだね？ さっきもすぐクリトリスを触ってオナニーしてたし、クリ責めされたいって言ってたもんね。クリトリス、触ってあげる♡」

パジャマのズボンを脱がされ、おまんこを隠すのがショーツだけになってしまう。優斗と住むようになってから買った、可愛い下着。それをじっくり見られてしまった。

「下着、もう濡れてる……♡ 色が変わってるの、わかる？」

っん♡と下着をつつかれると、くちっ♡と水音がした。イク寸前まで高ぶったおまんこが、続きを期待してヒクつく。けれど優斗の指はすぐに離れていってしまった。

「あっ……♡」

「残念？　じゃあ、少し自分の気持ちを言う練習をしようか。どうしてほしい？」

「っ、クリトリスっ……触ってほしいですっ……♡」

「よく言えたね♡ ご褒美に、いっぱいクリトリス触ってあげる♡」
「おっ……！♡♡」

すりっ♡　すり、すり♡♡

一か月ぶりの快感。しかも、初めて自分以外の人に触られている。その相手が、好きな人だなんて……♡

ぞくぞく♡と快感が駆け上がってくる。一定の速さで、弱くクリトリスを撫でられているだけなのに。普段なら絶対にイけない弱い快感なのに、今のクリトリスには刺激が強すぎた。

「ふ、う~~~~~……っ♡♡ ふ、おっ……♡♡ おっ♡♡」

クリトリスがむくむく♡と大きくなって、下着を押し上げていく。感じていると丸わりのクリトリスになってしまった。

こんなにすぐにイッたら、絶対に優斗に引かれてしまう。その一心で、イかないように耐える。

「うーん……陽菜ちゃん、また自分の気持ちを隠してない？ 俺、

すぐにわかつちやうんだ。だって、ずーっと陽菜ちゃんを見てたからね」

「ほおおっ♡♡ おっ♡」

すりすりすりっ♡♡

クリトリスを早く撫でられ、脚がピン♡と伸びた。感じている顔をじっくり観察される。

イキそうになった途端、クリトリスを撫でる速度が少し遅くなつた。優斗にはなにも隠せないと、クリトリスを使って教えられているようだ。それが恥ずかしいのになぜか嬉しくて、脳みそがパチパチ♡とはじける。

「即イキしちゃいそうで、いくのを我慢してましたっ♡ ごめんな

さいっ♡ おっ……♡♡

「いいんだよ。快感にゆっくり慣れていけばいいんだから。でも……どうしてイキ我慢しちゃったの？ いつでもイッていいのに」
「こ、こんなにすぐイッちゃうのが恥ずかしくてっ……♡ クリトリスがよわよわだってバレたくなかったのっ……♡」

「俺はよわよわクリトリスが好きだから、即イキしてくれたらすっごく嬉しいよ♡ でも、陽菜ちゃんは雑魚クリだったら恥ずかしいんだよね？ いっぱい我慢して、好きな時にイッていいよ♡」

「雑魚クリっ……!?!♡ おっ……♡」

その単語だけでイキそうになってしまい、慌てておまんこを締める。そんな私の頬に口づけた優斗は、変わらない速度でクリトリス

を撫で続けた。

すりすり♡とクリトリスの先っぽだけを集中的に撫でられる。勃起したクリトリスは下着にぴったり♡と張り付いて存在を主張しているのに、触れられるのは先っぽだけ。

撫でられると、くに♡くに♡と先っぽが曲がるのが恥ずかしくて気持ちいい。

「は、へっ……♡ はへえっ……♡♡」

「声をいっぱい出したほうが気持ちよくなれるんだよ。だから、おまんこ声をたくさん出そうね♡」

「おっ♡ んおおっ♡♡ おッ……♡♡」

もう、声を我慢しようという発想さえできなかった。一か月むら

むら♡していたクリトリスを撫でられるだけで、頭が簡単に馬鹿になっっていく。

（クリトリス撫でられただけでイッちゃうっ……♡ まだ数分しか経ってないのに♡ イッたら雑魚クリになっちゃうのに、イキたいつ♡ もうイクの我慢できないっ……！！♡）

脚がピン♡と伸びる。まっすぐに伸びた脚が、びくびくっ♡と震えた。

「イキ準備してるの、可愛いね♡ 陽菜ちゃんは何をしても可愛いんだから、なにも考えずにイッちゃっていいんだよ？ 数分しかイキ我慢できなかったよわよわクリトリスで、頭が真っ白になる本気アクメしちやおうね♡」

すりすり♡♡

すり♡ すり♡

もうイッてしまうとわかっていのに、優斗は一定の速さでクリトリスを撫でるだけだった。強く撫でてでもくれないし、指を速く動かしてもくれない。

クリトリスを優しくなでなで♡されるだけで、あっという間に絶頂へ向かっていった。

「おっ♡ これだめっ♡♡ イぐっ♡」

——ピタ。

優斗の指がいきなり止まり、離れていく。絶頂を取り上げられたクリトリスが、ひくんっ♡ひくんっ♡と震えて抗議した。

優斗を見上げると、優しい顔で私を見つめていた。

「だって、陽菜ちゃんが駄目だって言ったから。嫌がることはしたくないって言ったでしょ？ 駄目って言われたらきちんとやめるから、安心してね」

「あっ……♡ ご、ごめんなさい♡ 駄目じゃない♡ 気持ちよすぎてクリトリスが駄目になるって意味だから♡」

「素直に言えたね♡ クリトリス、優しく撫でてあげる♡」
すり、すり♡♡

すりすり♡ すりっ♡

クリトリスを甘く撫でられ、体が震えた。一度休憩を挟んだクリトリスは敏感になっていて、すぐに絶頂へと向かっていく。

「んああっ♡♡　これだめになるっ♡　おっ♡　いくっ♡　だめだめっ……！！♡」

——ピタ。

また指が離れていき、必死に腰をへこつかせる。空気に向かって情けなく腰をへこへこ♡しているのに、それを気にしている余裕はなかった。

「ごめんなさいっ！　駄目って言うのが口癖になってっ♡　本当は駄目じゃないのにっ♡　おねがい、やめないでえっ……！！　クリトリス撫でてくださいっ♡　お願いしますっ♡　クリトリスいじめてくださいっ♡」

「うーん……じゃあ、駄目じゃなくて、気持ちいいって言ってみよ

う？ 自分の気持ちを隠さないって約束したでしょ？ 駄目になるのが気持ちいいって言われたら、俺も納得してやめなと思うし」
「わ、わかった♡ そう言うから♡ イッたら報告しますからあっ……♡」

「ふふっ、じゃあクリトリスを撫でてあげる。俺に敬語を使って必死にアクメ乞いするくらいずうずうしてるクリトリス、情けなくイかせてあげるね♡」

すり♡ すりっ♡♡

すり、すり♡ すり、すり♡♡

さっきよりも弱くクリトリスを撫でられる。雑魚クリをイかせるには、この程度の刺激で十分だというような指使い。

それに気づいた途端、頭の中がバチバチッ♡とはじけた。

「おっ、イグっ♡ イギますっ♡ 駄目になるの気持ちいい♡
優斗にクリトリス駄目にされたいっ♡ あっ♡♡ あ~~~~……っ♡♡♡」

一か月ぶりの甘い絶頂。それは、頭が真っ白になる本気アクメだった。

口がだらしなく開いて、おまんこがヒクヒク♡と収縮する。ピン♡と勃ったクリトリスは、下着の上からでもわかるくらいぷっくり♡としていた。

「っ、お……♡♡ クリトリスを撫でられて、イキましたあっ……♡ おっ……♡♡♡」

「イッたことをきちんと報告できたね♡ 陽菜ちゃん、脚ピンする癖があるの？ 脚をまっすぐにしないとイケないの、陽菜ちゃんが
どういうふうにおナニーをしてたかすぐにわかって可愛いね♡」

「っお!?!♡ んおおっ!?!♡♡」

ぐりゅっ♡♡

イキたてのクリトリスを潰されて、休んでいた体が跳ねた。さっきまで、よしよし♡と甘やかされていたクリトリスが、潰されたことに混乱する。

人差し指で潰されて、逃げ場がないクリトリス。ビクン♡♡ビクン♡と震えて許しを乞うクリトリスを、さらに潰された。

「じゃあ、次はもっと気持ちよくなろうか♡ パンパンに膨らんだ

クリトリス、潰してあげるね♡」

「んおおっ♡♡ おっ♡ これだめっ♡ あ、うそっ♡ だめじゃないっ♡ クリトリス潰されて気持ちいいですっ♡ おっ♡♡」

「クリトリスを潰されたくて必死に駄目じやないって言うの、無様で可愛いね♡ こりっこりのクリトリス、潰しても弾力があって、癖になりそうだよ♡」

ぐりゅぐりゅっ♡♡

クリトリスを潰したままの指が円を描く。このままではすぐにイッてしまうのに、脚が勝手にピン♡と伸びてしまう。ガニ股になればイけないからそうしたいのに、脚を動かす余裕すらない。

指を動かして私の反応を見ていた優斗が、にっこりと笑う。その

表情には、隠しきれない興奮がにじんでいた。

「クリトリスを潰したまま上下に擦られるのが好きみたいだね。イ
く時は、どうされてイッたか報告してね♡」

ずりゅずりゅずりゅっ♡♡

クリトリスを撫でていた時とは違う、力強い手つき。クリトリス
を潰されたまま擦られ、体が反った。クリトリスを差し出すような
姿勢になってしまい、余計にクリトリスを潰される。

たった一本の指で潰されただけで、抵抗もできないまま勃起して
いるクリトリス。そのクリトリスを、ぐにゅぐにゅ♡と潰されてこ
ね回されながら、絶頂へ向かっていった。

「クリトリス潰されて気持ちいい♡♡ おっ♡♡ クリトリスみつ

ともなく潰されていくっ♡ んおおっ♡♡ いぐッ♡ アクメしましゅっ♡ お~~~~ッ♡♡♡」

イッている最中もクリトリスを潰されて擦られながら、なにも考えられないほど気持ちいい本気アクメに浸る。なにをされているか言いながらいくのが、信じられないほど気持ちよかった。

生まれて初めての連続イキ。それを知っているのか、優斗はクリトリスを優しく撫でて労わってくれた。

「脚ピンイキ、本当に可愛い……♡ ずーっを見ていたくらいだよ♡ じゃあ、そろそろ本格的に触っていくね」

ぐっしよりと濡れた下着を脱がされ、ついにおまんこが見られてしまった。